

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：32613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370177

研究課題名(和文) 米ソ冷戦と音楽 ソ連からの視点

研究課題名(英文) Cold War and Music: From the Soviet View Point

研究代表者

梅津 紀雄 (UMETSU, NORIO)

工学院大学・教育推進機構・講師

研究者番号：20323462

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：冷戦のさなか、米ソを軸とする東西両陣営は、音楽の領域でも戦いの火花を散らしていた。ソ連では、西側の前衛性は退廃として非難され、調性音楽に象徴される東側の保守性は文化統制の象徴として酷評され続けた。しかし、雪どけ期以降、両陣営は、対立し続けながら、交流を行った。そこでみられる対立は、古典的な芸術に対して敬意を払う、共通の価値観を基礎としたものだった。

研究成果の概要(英文)：At the height of the Cold War, the Eastern and Western camps were fighting furiously in the field of serious music. In the Soviet Union, the avant-garde of the West was condemned as decadent, the conservatism of the East, which was represented by the tonal music, had continued to be criticized as a symbol of the cultural control. However, after the Thaw period, the cultural exchange had begun between both camps, while continuing confrontation. The confrontation was based on a common sense of values that respects the classical art.

研究分野：表象文化論・ソ連文化史

キーワード：ソ連 冷戦 音楽 文化交流 雪どけ 古典 前衛 ロシア

## 1. 研究開始当初の背景

文化・芸術と冷戦との関係については、冷戦終結後、特にアメリカ文化の研究者の間で関心が高まり、Cultural Cold War(「文化冷戦」)の用語も一般的に用いられるようになりつつあった(例えば、Frances Stonor Saunders, *The Cultural Cold War: the CIA and the World of Arts and Letters* (2000)はCIAの関与を明らかにして注目を集めた)。だが、それらで顕著なのは欧米を軸とした視点であり、また対象もアメリカや西欧で活動した芸術家、文化活動家たちに偏っており、東欧・ロシアを軸とした視点は限られていた(成果を上げているのは、例えば、コーブランドやヴァレーズといったアメリカの作曲家の左翼思想の問題や、亡命ロシア人作曲家ニコラス・ナボコフの反ソ活動についての研究である)。

ロシアの作曲家をも対象とした著作や論文も存在するとは言え、ジャーナリスティックな視点のものや、特定のトピックに焦点を合わせたものが多く、包括的なものではなかった(Caute, David, *The Dancer Defects: the Struggle for Cultural Supremacy during the Cold War* (2003)は示唆に富んだ指摘を含むが、アーカイブ資料の利用も限定的で、事実の羅列にとどまっている。また、Carrol, Mark, *Music and Ideology in Cold War Europe* (2003)はロシアから亡命したストラヴィンスキーやソ連のショスタコーヴィチについての言及で参考になるが、西側の創作の自由をアピールすることを目的とした1952年のパリでの国際音楽祭が対象であり、ソ連からみた視点は決定的に欠ける。ロシアではボグダーノヴァの『音楽と権力：ポスト・スターリン時代』(1995)が先鞭をつけたが、註もなく読み物にとどまっていた)。

こうした状況を打開し、冷戦時代のステレオタイプを根底から問い直すためにも、ソ連の視点から冷戦と音楽との関係を検討することが有効であると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究では、以上の背景を踏まえ、冷戦と音楽との関係の諸相を、ソ連の文化政策と音楽家との相関関係を基礎として、アメリカからソ連への眼差しを意識しつつ、創作・批評・受容・宣伝及び音楽家のキャリア形成の観点から明らかにすることを目的として、遂行することとした。

(1)前史:1920年代~第二次世界大戦時の状況  
冷戦がイデオロギー対立に起因するとすれば、それはロシア革命に端を発している。他方、大戦中は連合国として米ソは協調していた。この二面性を視野に入れつつ、革命後のロシアを離れて欧米に出国していた作曲家ストラヴィンスキー、ラフマニノフらの言動と創作活動を検討し、特にプロコフィエフのソ連帰還について、ソ連政府の思惑とプロコフィエフ側の動機について解明する。それとともに、アメリカにおけるロシア・ソ連音

楽の受容について明らかにする。

(2)スターリン時代末期(トルーマン時代)の状況

ソ連で文化政策が最も硬直化し、アメリカでマッカーシズムが吹き荒れた冷戦初期の一つの象徴は、ソ連との協調継続を模索した人々が軸となった1949年のニューヨークでの平和擁護会議であった。そこに出席を強要されたショスタコーヴィチや自ら加わったコーブランド、バーンスタイン、会議の主旨に反対してショスタコーヴィチに詰問したニコラス・ナボコフらの立場を、アメリカにおける左翼思想の歴史を踏まえながら、分析する。

(3)雪どけ期(フルシチョフ/アイゼンハワー、ケネディ時代)

「雪どけ」と呼ばれる緊張緩和は、文化においては米ソ文化交流協定に象徴される。交流活発化の状況の下、ソ連はチャイコフスキー・コンクールを開始し、米在住のストラヴィンスキーをソ連に招聘し、ピアニストのリヒテルや指揮者ムラヴィンスキーの西側での活動を統制した。その背後の思惑を解明するとともに、ソ連を訪問したグレン・グールドやバーンスタインらのソ連への影響を分析する。

(4)「停滞の時代」(ブレジネフ/ジョンソン、ニクソン、フォード、カーター時代)

ソ連では反体制派(異論派)が形成され、演奏家の亡命が増大し、アメリカで亡命学者が出版した『ショスタコーヴィチの証言』が物議を醸す。これらの事象の背景を解明する。

以上が、申請時における当初の研究目的である。

## 3. 研究の方法

平成25年度

(1)前史:1920年代~第二次世界大戦時の状況  
当研究は「冷戦」の研究であるが、いわゆる冷戦期以前からソ連と西側との対立は生じていると見るべきであり、その観点から、第一次および第二次世界大戦の間の戦間期・戦中期から検討することとする。

平成25年度は主として、冷戦勃発前の状況を分析する。ロシアの作曲家ストラヴィンスキー、ラフマニノフ、プロコフィエフの文献、およびアメリカの作曲家コーブランド、バーンスタイン、らの文献を収集するとともに、ソ連共産党の文書収集に着手する。

平成26年度

(2)スターリン時代末期(トルーマン時代)の状況

平成26年度は、主として冷戦初期、すなわち、ソ連でいうスターリン時代の状況について主として検討する。ソ連では文化政策が硬直したいわゆるジダーノフ批判に当たる。研究代表者の梅津は、すでにこのジダーノフ批判について詳細な分析を行い、一定の成果を得ているが、2010年にロシアで出版された

ヴラソフの新たな文献などを消化した上で、さらに考察を深めたい。また、1949年のニューヨークでの平和擁護会議の参加者の資料を収集する。

平成27年度

(3)雪どけ期(フルシチョフ/アイゼンハワー、ケネディ時代)

平成27年度は、米ソ文化交流協定締結後の文化交流の活発化の実態を分析する。チャイコフスキー・コンクールや亡命ロシア人であるストラヴィンスキーの訪ソなどについて文献収集を行い、分析する。

平成28年度

(4)「停滞の時代」(ブレジネフ/ジョンソン、ニクソン、フォード、カーター時代)

平成28年度はこれまでの分析結果の整理を進めるとともに、ソ連史でいう「停滞の時代」の分析を進める。亡命演奏家たちの多くはアメリカに行き着いたし、『シヨスタコーヴィチの証言』が初めて出版されたのもアメリカであった。活発化した後期ソ連論を踏まえて、ソ連における非公式音楽の動向と西側との関係についても検討する。

#### 4. 研究成果

(1)平成25年度

主として、前史として1920年代から第2次世界対戦時の状況について検討し、冷戦勃発前の状況を分析した。ロシアの作曲家ストラヴィンスキー、ラフマニノフ、プロコフィエフの文献、およびアメリカの作曲家コープランド、バーンスタインらの文献を収集するとともに、ソ連側のアーカイヴ史料を参照した。その際、ロシア連邦モスクワ市を訪れ、ロシア国立図書館やロシア国立文学芸術文書館などを利用した。

ロシアから移住・亡命した作曲家たちを比較検討するなかで、作曲家メートネルにも注意を向ける必要性が浮かび上がってきた。プロコフィエフと同様に、一時帰国して演奏旅行を行ったメートネルに、一度も帰国していないラフマニノフを加えると、ソ連を代表する作曲家を確保するために出国した作曲家にアプローチを掛けていたソ連側の思惑との関係で、作曲家側の異なる姿勢が鮮明になるからである。

他方、コープランドやバーンスタインらの左翼的メンタリティについては、いわゆるニューヨーク知識人らの動向とともに、その位置づけを慎重に検討する必要があることを再認識した。

なお、この時点での簡潔な報告を、スラブ・ユーラシア研究センター共同研究報告会にて、「冷戦と音楽：米ソ対立と文化交流の実態について」として行っている。

(2)平成26年度

主として冷戦初期、すなわち、ソ連でいう

スターリン時代末期の状況について主として検討した。ソ連では文化政策が硬直したいわゆるジダーノフ批判に当たる。研究代表者の梅津は、すでにこのジダーノフ批判について詳細な分析を行い、一定の成果を得ているが、2010年にロシアで出版されたヴラソフの新たな文献などを消化した上で、さらに考察を深めた。

また、1949年のニューヨークでの平和擁護会議の検討のために、シヨスタコーヴィチ(1906-75)やニコラス・ナボコフ(1903-78)ら、参加者の関係文献を収集した。

また、平成25年度に引き続き、ロシア連邦モスクワ市にて資料収集を行い、ロシア国立図書館を利用し、ロシア国立文学芸術文書館などのアーカイヴでの調査を行った。

冷戦初期の時期はスターリンとまったく同じ日に没した作曲家プロコフィエフ(1891-1953)の晩年でもある。プロコフィエフの本格的な検討を前提として自伝と日記を読み進め、「作曲家の自叙：プロコフィエフの自伝と日記を中心に」と題して、研究プロジェクト「近代ロシア文化の自叙の研究：自伝的散文と回想を中心に」第1回研究会(2014年11月29日、早稲田大学)で報告した他、「作曲家にとっての自叙：冷戦前のプロコフィエフの日記と自伝」と題して、研究プロジェクト「20世紀ロシア音楽再考：社会主義経験の意義を問いなおすために」第1回研究会(2015年2月1日、札幌大谷大学)でも発表して、出席者の批判的な意見を拝聴した。

また、ジダーノフ批判のその後をめぐって、論文「雪どけ期のソ連音楽政策の転換過程中央委員会文化部文書に見るその実態」(『ロシア語ロシア文学』第46号(日本ロシア文学会)2014年10月、111~130頁)を発表している。

(3)平成27年度

主として雪どけ期に活発化した文化交流の実態の分析を行った。第1回チャイコフスキー・コンクール(1958)はその象徴である。米国人ピアニスト、ヴァン・クライバーンのピアノ部門優勝に終わったこのコンクールを通して、近代ヨーロッパ文化を基礎とした教養主義的な基盤を共有した上で、米ソ両国が文化的にも競争を行っていたことが鮮明に浮かび上がってきた。19世紀の文化を擁護するのか、あるいは前衛芸術への展開を重視するかで両国の公的な立場は異なっていたが、両者の競争が成り立っていたのは教養主義的な基盤を共有していたからであった。

他方、ストラヴィンスキーの1962年のソ連訪問は、ソ連の音楽政策の転換を鮮明に印象付ける事件であった。恐らくはフルシチョフの承認のもと、作曲家同盟第一書記のフレニコフらがロサンジェルス音楽祭でストラヴィンスキーの楽屋を訪れ、そして彼の自宅を訪問した際に訪ソを打診したことを

発端とし、党中央が正式に許可した上で、ヒューロックの媒介のもとで実現された。訪ソの際のストラヴィンスキーの言動は、彼が米ソ両国を客観的なまなざしで観察していたことを明らかにする。すなわち、米ソ両国の輸出物とともにオーケストラやバレエ、オペラのような古典的なパフォーミング・アーツであり、保護の仕方にもその差異が認められるということである。このように、米ソ両国はただ単に対立していたのではなく、共通の基盤のもとに、価値観を共有しながら競争していたことがこの時期の様々な事件において鮮明に観察できるのである。

また、同年度にはスターリン賞・レーニン賞の研究にも着手し、ソ連における芸術文化の奨励の実態や多民族国家としての独自性を浮き彫りにすることができた。

なお、以上の研究の中でソ連=教養主義国家という視点が浮かび上がってきたことが平成 27 年度の収穫の一つである。

#### (4)平成 28 年度

雪どけ期に続いて、ソ連の「停滞の時代」に即して研究を進めた。プレジネフらの「老人支配」時代のソ連は、一面では「停滞」していたが、芸術音楽の分野においては、シュニトケやペルト、グバイドゥーリナら、新たな世代の独創的な作品群が徐々に非公式領域から公式領域へと浮上し、認知を拡大していく時代だった。その過程で 12 音技法が容認され、事実上禁じられている技法は消滅するが、「推奨されていない」として口頭での検閲が執拗に行われ続ける。ソルジェニーツィンの国外追放やロストロポーヴィチ夫妻の市民権剥奪が物議を醸し、相次ぐ亡命者が不条理な管理と不自由を訴えることで、ソ連文化に対する否定的イメージが強まり、同時代的関心は低下する。その最中にヴォルコフ編『ショスタコーヴィチの証言』が出現し、ソ連文化に対する関心は活性化される。

こうした状況について、ソ連のゴスコツェルト（国立演奏会組織）や作曲家同盟などの史料収集に努め、既存の二次資料を読み直し、新たな文献や過去 3 年の研究と比較検討して、鮮明に浮かび上がらせることを試みた。

得られた知見を元に、様々な研究発表を行った。米ソの共通性にも着目しながら、教養主義国家としてのソ連のあり様を芸術音楽から考察したのが「芸術音楽から見たソ連：雪どけ期のショスタコーヴィチを中心に」(4 月 23 日、東京大学)である。冷戦の中でのソ連の音楽界の状況については、「後期ソ連の音楽界のいくつかの特質をめぐって」(9 月 6 日、東京藝術大学)、「後期ソ連の前衛的芸術音楽にみる普遍性と個別性：アルヴォ・ペルトを中心に」(1 月 29 日、「ポスト・クリョーヒン・スタディーズ」) および「ストラヴィンスキー訪ソ(1962)とその周辺」(3 月 16 日、東京藝術大学)において取り上げた。

#### 5. 主な発表論文等 (研究代表者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

1. 梅津紀雄・半谷史郎「邦楽 4 人の会」の誕生 オーラル・ヒストリーの中のモスクワ青年学生平和友好祭(1957)」、『Slavistika』、2017 年、掲載予定、査読あり

2. 梅津紀雄「『うたごえ運動』 その背景の探求 ソ連幻想と弱者意識」、『工学院大学研究論叢』、2017 年、31-48 頁、査読なし

3. 梅津紀雄「非公式芸術音楽における管理と自由：後期ソ連と冷戦」、『工学院大学研究論叢』、2016 年、23-37 頁、査読なし

4. 梅津紀雄「冷戦下の非公式芸術の興隆 文化現象としての後期ソ連」、鈴木正美・岡島豊樹編『研究報告集 ソ連邦崩壊前後におけるアンダーグラウンド芸術の変容に関する研究』、2015 年、16-23 頁、査読なし

5. 梅津紀雄「チャイコフスキーの都落ちと自立～交響曲第 1 番の背景としてのモスクワ」、『シンフォニー』、2014 年 11 月号、16-18 頁、査読なし

6. 梅津紀雄「雪どけ期のソ連音楽政策の転換過程 中央委員会文化部文書に見るその実態」、『ロシア語ロシア文学』第 46 号、日本ロシア文学会、2014 年、111-130 頁、査読あり

7. 梅津紀雄「解説 ラフマニノフ《晩椿》作品 37(抜粋)」、『国立モスクワ合唱団(プログラム)』、ジャパン・アーツ、2013 年 5 月、査読なし

〔学会発表〕(計 15 件)

1. 梅津紀雄「ストラヴィンスキー訪ソ(1962)とその周辺」、研究プロジェクト「20 世紀ロシア音楽再考：社会主義経験の意義を問い直すために」平成 28 年度第 2 回研究会、2017 年 3 月 16 日、東京藝術大学(東京都台東区)

2. 梅津紀雄「後期ソ連の前衛的芸術音楽に見る普遍性と個別性：アルヴォ・ペルトを中心に」、公開研究会「ポスト・クリョーヒン・スタディーズ」、2017 年 1 月 29 日、Fttari 水道橋(東京都文京区)

3. 梅津紀雄「スメタナ：ミュシャの愛国心を鼓舞した偉大な作曲家とその後継者たち」、講座「ミュシャを知りたい フランスで花開き、チェコへ帰郷した画家の人生」、2017 年 1 月 24 日、江東区東大島文化センター(東京都江東区)

4. 梅津紀雄「20 世紀ロシアの作曲家の自叙：ストラヴィンスキーとプロコフィエフ」、ワ

ークショップ「20世紀前半のロシア文化における自叙の問題」、日本ロシア文学会全国大会、2016年10月23日、北海道大学(北海道札幌市)

5. 梅津紀雄「20世紀ロシアの作曲家の自叙：ショスタコーヴィチ、プロコフィエフ、ストラヴィンスキー」、研究プロジェクト「近代ロシア文化の自叙の研究：自伝的散文と回想を中心に」平成28年度第2回研究会、2016年9月20日、京都大学(京都府京都市)

6. 梅津紀雄「後期ソ連の音楽界のいくつかの特質をめぐって」、研究プロジェクト「20世紀ロシア音楽再考：社会主義経験の意義を問い直すために」平成28年度第1回研究会、2016年9月6日、東京藝術大学(東京都台東区)

7. 梅津紀雄「日ソ文化交流とうたごえ運動」、研究会「赤い星に願いを：社会主義文化の伝播と比較」、2016年8月20日、北海道大学(北海道札幌市)

8. 梅津紀雄「作曲家の自叙と作曲家像・作品解釈：ショスタコーヴィチとストラヴィンスキー」、研究プロジェクト「近代ロシア文化の自叙の研究：自伝的散文と回想を中心に」平成28年度第1回研究会、2016年4月23日、早稲田大学(東京都新宿区)

9. 梅津紀雄「藝術音楽から見たソ連：雪どけ期のショスタコーヴィチを中心に」、岩波ロシア革命論集研究会、2016年4月23日、東京大学(東京都台東区)

10. 梅津紀雄「藝術音楽にとってソ連とは／ソ連にとって藝術音楽とは何だったか、をめぐりいくつかの断章」、研究プロジェクト「20世紀ロシア音楽再考：社会主義経験の意義を問い直すために」平成27年度第2回研究会、2016年3月23日、仙台青葉カルチャーセンター(宮城県仙台市)

11. 梅津紀雄「レーニン賞・スターリン賞の実態の研究・序説 1958年レーニン賞選考過程を中心に」、研究プロジェクト「20世紀ロシア音楽再考：社会主義経験の意義を問い直すために」平成27年度第1回研究会、2015年8月22日、東京藝術大学(東京都台東区)

12. 梅津紀雄「作曲家の自叙 プロコフィエフの日記と自伝」、研究プロジェクト「20世紀ロシア音楽再考：社会主義経験の意義を問い直すために」平成26年度第1回研究会、2015年2月1日、札幌大谷大学(北海道札幌市)

13. 梅津紀雄「音楽の冷戦と非公式芸術の興隆」、研究会「ソ連邦崩壊前後におけるアン

ダーグラウンド芸術の変容に関する研究」、2015年1月31日、新潟大学サテライト・キャンパス「ときめいと」(新潟県新潟市)

14. 梅津紀雄「作曲家の自叙 プロコフィエフの自伝と日記を中心に」、研究プロジェクト「近代ロシア文化の自叙の研究：自伝的散文と回想を中心に」平成26年度第1回研究会、2014年11月29日、早稲田大学(東京都新宿区)

15. 梅津紀雄「冷戦と音楽：米ソ対立と文化交流の実態について」、スラブ・ユーラシア研究センター共同研究報告会、2013年7月6日、北海道大学(北海道札幌市)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

梅津 紀雄 (UMETSU, Norio)

工学院大学・教育推進機構・講師

研究者番号：20323462